



入浴しないときは浴そうふたを

閉めておきましょう

— 小さいお子さんや高齢者の転落事故防止の観点から —

2008年2月18日

財団法人製品安全協会

寒い冬は、身の心も温かくなるお風呂が恋しくなる季節です。

しかし、入浴する前の冷えた身体のまま急に熱い湯船に浸かると心臓に負担がかかり、特にお年寄りには重大な傷害を負うこともあるそうです。このような観点から様々な方があらかじめ風呂場を温めることを勧めています。その1つとして『湯を沸かすときには、浴そうふたを開けておくとよい』という方法を見受けます。

この方法について、当協会では小さいお子さんや高齢者の方が”開けた浴そうふたのすき間から落下・転落するおそれがある”ため避けるべきと考えています。実際に2005年には全国で40人近いお子さん(0～9歳)が浴そうで溺れて亡くなっています。また、浴室事故は住宅関連事故の16%を占める※という報告もあり、同報告では事故にあった人が最も多いのは4歳以下の乳幼児(29%)、次いで65歳以上の高齢者(21%)とされています。

実際の事件事例の中には、お子さんが湯の入った浴そうを覗き込んでいて落下し、溺死したという「浴そうふたを閉めておけば防げたかも知れない事故」もあります。

阪神大震災以降、震災時に生活用水を確保するという目的の下、浴そうに残り湯(水)を溜める指導が各方面でされているようです。

2007年2月に改正されたSG基準でも『ふたがずれて、隙間が開くと、乳幼児や高齢者が転落することがあるので、特に注意すること』という注意文を取扱説明書に書くこととしました。

浴そうふたを”しっかりと閉めて”お子さんや高齢者の転落事故防止に務めることが大切だと考えています。

※ 参考：家庭内事故に関する調査報告書(1999/6/4 国民生活センター)

【本件に関するお問い合わせ】

財団法人製品安全協会

〒110-0012 東京都台東区竜泉2-20-2 ミサワホームズ三ノ輪

広報チーム 若井、業務グループ 松田

電話：03-5808-3301(広報チーム)、03-5808-3302(業務グループ)

FAX：03-5808-3305 E-Mail mail@sg-mark.org